（第3種郵便物認可）

第30回中日静岡ジュニア体育賞

第30回中日静岡ジュニア体育賞の受賞者が決まった。今年夏の全国中学校体育大会で活躍した県西部地区の中学生選手たちと指導者が対象となる。横顔を紹介する。

大賞

陸上女子1500メートル優勝
杉森（すぎもり） 心音（ここね）さん
浜松・北浜

全国中学大会決勝では想定通りにラスト300メートルからパート。二位以下を見る間に引き離して優勝。昨年のこの種目の覇者、米沢奈々香選手（宮城・仙台育英高一年）に続き浜松北浜勢連覇を達成した。

冬季練習でスピードアップ、体力づくりに力を入れ、今季は四月に4分25秒58を出すと、七月の県中学総体で4分21秒27の東海中学総体B1マーク。日本中学記録まで1・91秒差で臨んだ全国中学大会で下馬評通りの強さを見せつけた。

全国の決勝では予選を突破して優勝候補に数えられていたライバルで友人の細谷愛子選手（静岡東中）が足の痛みで棄権。決勝前に「私の分まで頑張って」と声を掛けられ思わず泣いてしまったが、気持ちを切り替えると細谷選手の悔しさもりばねにした。

秋には県総体の中学生B1500メートルに出場し、高校一年生選手と競い三位。「日本中学新記録狙ったけれどきつかった」と笑った。3000メートルだけでなく、3000メートルも記録への執着は強い。「これからも記録会などに積極的に出場して一種目で日本中学新記録をつくりたい」と手が届くところに見えている大きな目標に意欲を燃やす。

陸上男子走り高跳び2位
準大賞 平野（ひらの） 海吏（かいり）さん
浜松・新津

1メートル95の自己最高記録を持ち、優勝を目指して臨んだ夏の全国中学大会だったが、1メートル90で二位。「思った様に跳躍ができなかった」と悔しさをにじませる。

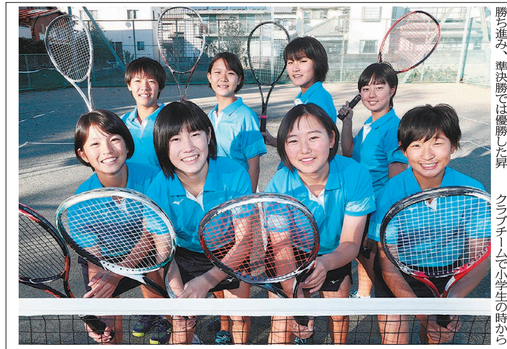
しかし、秋になって真価を発揮した。全国ジュニア五輪で1メートル98を跳んで再び全国二位になった。浜松市スポーツ祭では2メートル01まで自己記録を更新。市スポーツ祭で二九八七（昭和六十二）年に生まれ、今まで破られていない東海中学記録（2メートル05）更新をかけて2メートル06に挑戦し失敗したが、「体が少しかすっただけ。跳べるという手応えは感じた」と振り返った。

新津小六年の部活動で走り高跳びを体験。面白さに魅了され、中学では一年の秋から走り高跳びに取り組んできた。

昨年は全国中学大会の参加標準記録を突破できなかったが、冬にパワーを越える時の腕の振り方や踏み切りなどを改善し、今年の躍進につなげた。

知り合いの高校生らのアドバイスを受け、自宅近くで走り込みを続けるなど競技への意欲は旺盛。「高校ではインターハイ出場が目標。もその前に2メートル06を跳びたい」と闘志を燃やしている。

ソフトテニス女子団体3位 準大賞 浜松・浜北北部



三位までが全国大会に進める東海大会三位で通過。全国大会で勝ち進み、準決勝では優勝した昇陽（大阪）に敗れたが、堂々の三位に入った。

クラブチームで小学生の時から一緒にプレーしてきた選手が多く、「全国で優勝しよう」を目標に練習した。帰宅後のクラブ練習、週末の遠征や午前からの練習など、毎日のようにテニスを握る「ソフトテニス漬け」の日々を送って確実に力をつけた。

全国大会では初戦の山形十中（山形）戦から、河合翔羽主将（三年）が「負けるかと思った」と振り返る苦戦だったが、ここでは勝って波に乗った。

選手層の厚さを生かし、各選手の調子などを見て、これまでのペアを時に試合に応じて変更。これがうまくはまり、準々決勝まで勝ち抜いた。

全国大会までは身体の痛みを抱える選手やけがを負う人もいたが、「全国一位入賞」という同じ目標を持つことで乗り切った。「何合主将は「小学校の時から知っている選手が多く、皆仲が良かった。応援されるチームになろうとあいさつなども大事にしたのも良かった」とチームワークでつかん結果に笑顔を見せた。

来年の全国中学大会は浜松市が会場で、今年はレギュラー以外の部員が全国大会があった京都まで応援に来るなど、チームが一つになれた。力を合わせ浜松市の全国大会を目指したいと抱負を語る。

優秀指導者賞
山本（やまもと） 純也（じゅんや）さん
浜北北部 女子ソフトテニス部顧問

ソフトテニス女子団体戦で二位になった浜松浜北北部中を指導。小学校から競技を続ける選手も多く、「個人の良さを失わず、さらに成長できるよう気を使った」と振り返る。

浜松市北星中、浜名高校で競技し、インターハイなども経験した。引佐南部中から赴任一年目だったが、選手と同じ時間を過ごしたり、コミュニケーションを取ることに気持ちを砕いた。全国大会では各選手の調子や相手との相性を考え、これまで組んでいたペアを試合ごとに変更するなどして勝ち進んだ。「選手に力があったからペアを変えてもうまく対応できた」とたたえる。

ボート女子総合優勝 特別表彰 浜松・入野

かじ付きクォドルプル三位をはじめ、四クルーが八位以内に入賞、二年ぶりの女子総合優勝を果たした。

全国中学大会は台風の影響で、千メートルコースの予定が五百メートルに変更され、持ち味の後半の強さを発揮できなかったが、アクシデントをはね返した。

六月の佐鳴湖での大会で苦戦。その悔しさからピッチオを使ったフォームの見直し、速いペースでのこぎ、男子クルーとの練習など、練習メニューを見直してレベルアップした。

コース変更などもあって総合優勝できるとは思わず、表彰式で初めて知った。ダブルスカルの菱沼夏帆選手（三年）、かじ付きクォドルプルの鈴木結菜選手（同）は「皆が頑張った成果」「総合優勝を知ってびっくりした」と振り返る。

鶴見柚（ゆず）主将（同）は「二年生も頑張り最後に優勝できるかった」と部員が力を合わせた結果を喜んだ。

陸上男子400メートル4位 優秀賞
須和部（すわべ） 琢杜（たくと）さん
浜松・積志

全国中学大会では自己ベストを連発し四位入賞。「三位が良かったけれど、いろいろ経験でき、いい大会でした」と振り返る。

「緊張した」と言う予選ったが、自己最高（50秒49）を塗り替える50秒39で翌日の準決勝へ。準決勝で初めて50秒の壁を破る49秒46をマークすると、「楽しんで走ろう」と臨んだ決勝で四位に食い込んだ。

昨秋の県新人大会で400メートル、8000メートルで二冠を達成。8000メートルでは全国参加標準記録を突破できず、400メートルだけの全国出場だったが、「400メートルに絞れて良かった」と余裕を持ち、全国入賞を勝ち取った。

二人の兄の影響などで四から陸上に親しみ、中二から400メートル、800メートルに取り組んできた。「800メートルは後半が弱いので400メートルに絞れ」という兄の助言に従い、400メートルを入れる高校ではインターハイ出場を」と兄の目標に向かって走り続ける。

陸上男子400メートル6位 優秀賞
中道（なかみち） 大貴（だいき）さん
浜松・北浜

「ここが勝負」と考えていた準決勝で49秒50の自己ベストをマーク。勢いに乗って臨んだ決勝では、レース前にあった緊張も走り出すとともに、前半200メートルの内容。しかし、後半でフォームが崩れた」と失速した。

小五から浜松河輪プスリートクラブで陸上を始め、中学では短距離、ハードルなども走ったが、一年の秋から400メートルに変わった。

二年までは目立った成績はなく、「全国大会出場は夢だった」と言うが、今年はスタートや腕振りなどを改善したことで力を付け、大会で走るたびにタイムを更新してきた。

身長一八六センチ、体重七〇キロと恵まれた体で、将来は有望。

「今のままではスピードが足りない。200メートルに取り組んで走力を上げ、三年の時に400メートルで全国優勝したい」と大きな目標を掲げる。

陸上男子走り高跳び7位 優秀賞
豊田（とよだ） 皓士（ひろし）さん
浜松・大竜

全国中学大会は予選で1メートル90の自己最高をマークしたが決勝では1メートル87で七位。「決勝は雰囲気がいつものの大会と違っていた」と振り返る。

足を踏ん張り、十分に練習を積めなかった。五月から通常の練習になったが、六月末の県中学選抜大会は1メートル70。不安を抱えたまま七月の県中学総体に臨んだ。全国切符をつかむなど、全国までの道のりは平たんではなかった。

小学校の時から走ることが好きで、当初は走り幅跳びをしていたが、たまたま出た四種競技で走り高跳びの記録が良かったため変更。これが幸いし、中学最後の年に全国入賞を飾った。

「まだ基礎がしっかりできていない。体の動き、跳躍後の腕の位置などフォームの改善もしたい」と課題を挙げ、「全国入賞で高校でインターハイに出たい」と前を向く。

陸上男子走り幅跳び7位 優秀賞
村松（むらまつ） 晃成（こうせい）さん
浜松・鷹玉

全国中学大会初出場で6メートル82の自己最高を出し七位入賞。その時は「いい経験ができた」と思ったが時間がたつにつれ、「7メートルを越えたかった」という思いが強くなってくる。

二年では6メートル12が最高だったが、走り込みや坂道ダッシュに取り組んで走力をアップ。リラックスした跳躍を意識するなど、心も体も改善してきた。

全国中学大会予選では、二本目は踏み切りが合わなかったが、三本目に6メートルを跳んで決勝へ。決勝では足の疲れも感じたが、援を励みに「やるしかない」という強い気持ちで入賞を引き寄せた。

小学校四年の時に浜北アスリートクラブで陸上を始め、短距離を経て走り幅跳びを専門にした。足だけでなく胃の強さも自覚で、投げてきても興味を示す。「やり投げも面白そう。チャンスがあれば」と表情を緩める。

卓球女子団体5位 優秀賞 浜松修学舎

卓球男子団体5位 優秀賞 浜松修学舎

バスケットボール男子5位 優秀賞 浜松開誠館

テニス男子団体5位 優秀賞 浜松西高中等部

水泳女子400メートルリレー4位 優秀賞 浜松西高中等部

全国をかけた東海大会で二位になり、五年ぶりの二回目の出場を果たした。

春の選抜大会を含めて全国では未勝利。まず初戦突破が目標だった。一回戦の相手はシード校の東海大菅生高中等部（東京）で、対戦相手を予想して「これで負けたら仕方がない」と決めたオーダーだった。その勢いで二回戦の本山（兵庫）も3―1で退けた。

勢いは続き、準々決勝の第一シード・浪速（大阪）とも拮抗（きっこう）し試合展開になった。最後は2―2から相手のエースに押しりのられた。「みんなで楽しく泳ごう」と話し合い、決勝は粘りの泳ぎを見せ、予選タイムをさらに更新する4分59秒03で四位に入った。

四人は「エントリーの時よりも、タイムも順位も上がったので満足」と納得の表情を浮かべたが、メダルに届かなかったことには「ちょっと悔しい」と残念がった。

それでも、一普段味わうことのできない雰囲気の中で、泳げたのは良い経験になった」と口をそろえた。

メンバーは、第一泳者の山田茅帆選手（二年）、第二泳者の秋山紗希選手（二年）、第三泳者の尾上夏野選手（同）、第四泳者の鈴木杏奈選手（三年）。エントリータイム（4分7秒30）が出場二チーム中八番目だったこともあり、決勝進出を目標に臨んだ。

予選では、チームベストを更新する4分59秒58で泳ぎ、全体の五番目のタイムで決勝進出を決めた。

小学校の時から走るのが好きで、当初は走り幅跳びをしていたが、たまたま出た四種競技で走り高跳びの記録が良かったため変更。これが幸いし、中学最後の年に全国入賞を飾った。

「まだ基礎がしっかりできていない。体の動き、跳躍後の腕の位置などフォームの改善もしたい」と課題を挙げ、「全国入賞で高校でインターハイに出たい」と前を向く。

陸上男子走り幅跳び7位 優秀賞
村松（むらまつ） 晃成（こうせい）さん
浜松・鷹玉

全国中学大会初出場で6メートル82の自己最高を出し七位入賞。その時は「いい経験ができた」と思ったが時間がたつにつれ、「7メートルを越えたかった」という思いが強くなってくる。

二年では6メートル12が最高だったが、走り込みや坂道ダッシュに取り組んで走力をアップ。リラックスした跳躍を意識するなど、心も体も改善してきた。

全国中学大会予選では、二本目は踏み切りが合わなかったが、三本目に6メートルを跳んで決勝へ。決勝では足の疲れも感じたが、援を励みに「やるしかない」という強い気持ちで入賞を引き寄せた。

小学校四年の時に浜北アスリートクラブで陸上を始め、短距離を経て走り幅跳びを専門にした。足だけでなく胃の強さも自覚で、投げてきても興味を示す。「やり投げも面白そう。チャンスがあれば」と表情を緩める。